

梅崎春生全集 第六卷

梅崎春生全集

第六卷

新潮社版

梅崎春生全集 第六卷

昭和四十八年十月五日印刷
昭和四十八年十月十日発行

著者 梅崎春生

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社 金羊社

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(266)一一二一(大代表)
振替東京八〇八番

全七巻セット定価 一一九〇〇円



梅崎春生全集

第六卷

編集委員

山本健吉
本多秋五
野間宏
椎名麟三

第六卷『狂い風・幻化』目次

日時計（殺生石）……………セ

庭の眺め……………テ

空の下……………キ

三日間……………ミ

犯人……………ヒ

魚の餌……………イ

突堤にて……………ク

炎……………二五

モデル……………二九

凡人凡語……………三六

記憶……………四〇

狂い風……………五三

仮象……………七三

朱色の天……………九六

幻

化

.....三六

解題

古林

尚

.....四六

解説

山本

健吉

.....四三

日時計（殺生石）

一

その猿は、始めの頃は、しばらく小野六郎に親しまなかつた。馴れ近づく気配すら、なかなか示そうとしなかつた。灰白色の毛におおわれたこの小動物は、つまり外界に妥協することから、意地になつて自らを拒んでゐる風であつた。猿の身でないから、その本心は判らないが、すくなくとも六郎にはそう思えた。餌を与えにゆく彼にたいしても、時としてはいきなり威嚇する姿勢をとつたり、誇大な恐怖の表情を示して騒いだり、また冷たく黙殺するそぶりに出たりして、素直に食餌を受取ることはほとんど稀れであつた。そういう反撥の風情は、彼の手に属する以前から、この猿に具わっていたに違いないが、檻がこの庭に運ばれて以来も、ひとつのしきたりとして、しばらく続けられていた。

しかし、この猿を飼ひ馴らすという気持は、始めから六郎にあつた訳ではなかつた。

猿がこの庭に来たのも、六郎がそれを求めたり、欲したりしたからではなかつた。もともとこの猿は、六郎のものではない。所有主は別にあつた。鍋島という彼の昔の友達である。その鍋島に頼まれて、六郎はこれを預つてゐるに過ぎなかつた。

あの日鍋島から、これを当分預つてくれと頼まれたとき、六郎は少しためらつた。

「当分って、何時頃までだね。いろいろ手がかかるんだろ
うな。食物やなにかに」

「いや、それは簡単だ。君の食事の残りをやるだけで大丈
夫だ。手はかからない」

冬の日であつたから、鍋島はしゃれた形のスキー帽をかぶり、ふかふかした新しい外套を着て、六郎の庭先に立つてゐた。そして六郎の方は見ず、冬枯れの荒れた庭全体を、眼で計るように見廻してゐた。昔からそうだったが、この男はこんな動作をするとき、身体いっぱいに動物的な精悍さを漲らしているように見えた。自分の意を通すために、相手の言い分を無視するような、なにか強靱なそぶりであつた。時折現われるこのそぶりが、鍋島という男に生得のものか、それとも意識的なものか、かなり長いつき合
いであつたけれども、六郎は未だにはかりかねてゐた。や

がて鍋島は手をあげて、庭のすみを指さした。

「猿小屋をつくるなら、先ずさしあたり、あそこだな」

そこは家の側面と板塀が直角になった、陽のあたる庭の一隅であった。そこには一本の瘦せた南天なんてんの木が、小さな赤い実をいくつか点じていた。しかし六郎は、鍋島の指さした方は見ずに、鍋島の外套の柔らかな毛に踊る、冬の日射しの微妙な色合いをぼんやり眺めていた。その色は眼にとらえられないほど淡く、はかなく、幽かにちりちりと乱れ動いていた。人と話している時や仕事をしている時などでも、それと関係のない、何でもない別の事象に、ふと心を奪われる性癖が、六郎にはあった。鍋島の外套が動く、日射しは翳かげをふくんで、小さく七色に揺れた。ほのぬくい毛織物の匂いも、それにつれてかすかにただよった。「猿小屋の費用は、もちろんこちらで持つ。日々の保管料も出すよ」

「まだ引受けるとは言わないよ」と六郎はふと気持を元に戻されて、すこし笑みをふくみながら答えた。「飼って面白い動物かね、それは」

「面白いさ。あんな面白い動物はない。ただし卵ごときを産まないから、実用的じゃないけれどな」

「乳なども出さないのか」

「出さないね。雄だからな。しかし無邪気なものだよ。しかもよく馴らしてあるしよ。極くおとなしい猿だ。君など

にはも度手頃だろう」

「君の家じゃ、飼えないのかね」

少し経って、なにか考え込む顔付きになりながら、六郎は訊ねた。

「おれのうちでは駄目だ。町なかだから、音が多過ぎるんだ。あれじゃ猿は痩せてしまう」

猿を飼うには、ある程度しずかな環境が必要なのだと、鍋島は鼻を鳴らしながら説明した。その説明も、六郎はあまり聞いていなかった。声は耳を素通りするだけで、六郎は別のことをかんがえていた。庭のすみの南天なんてんの方を、すこしまぶしそうに眺めながら、やがて六郎はしずかに口を開いた。

「猿って、あの地方のやつだな。きつとそうだろう。あの山には、猿が沢山いたからな。そいつは奥さんの方の——」

「あ。鈴子のだ」

鍋島はかるくさえぎった。それから一寸しんとした沈黙が来た。鍋島はだまって庭先に立ったまま、縁側の彼を見おろしていた。この家に、それまでに鍋島は何度か訪ねてきていたが、一度も上にあがったことはない。いつも庭先で用を済ませていた。その日もそうであった。冬にしては、割にあたかい好天氣が続いていたので、ぼろぼろに乾いた庭土を、鍋島の赤靴が踏んでいた。へんに平たい感じのするその靴の形に、その時六郎は視線をおとしてい

た。猿を預ることはいいけれども、それによって、また鍋島とのつながりが一つ殖える。そんなことを六郎は頭の遠くでぼんやり考えていた。鍋島のいらいらしたような声が、そこに落ちてきた。

「預け放しにする訳じゃないよ。いずれまた引取るんだ。それまでも、月に二三度は見に来るよ」

彼を見おろしているらしい鍋島の視線を、よく判らないが何かの意味をもつ圧力として、六郎は額に感じていた。

別段の根拠はなく、ただ六郎がそう感じるだけであった。

正体の知れない敵に、ただひたすら体を丸めて防禦しようとする昆虫の姿勢を、六郎は瞬間自分自身に感じた。そしていま眼界にあるぼろぼろの庭土、平たい形の赤靴、そして鍋島の声音、（あ、鈴子のだ）とさえぎった軽い響きなど。これらが一緒になって、ある一つの感じとして、何時までもなんとなくおれの記憶にとどまるだろう。故もなくそんな想念が、その時ちと六郎の脳裡をはしり抜けた。その予感、なにかふしぎな倦怠感を、漠然ともなっていた。次の瞬間、身体のうちこの筋肉から、急に力が抜けてゆくような感じの中で、猿を預ることも断ることも、どちらにしても同じことだ、と考えながら、六郎はゆるゆると顔を上げて行った。鍋島はその六郎の顰めたような鼻の辺をまっすぐに眺めていた。そして押しつけるように言った。

「じゃ、いいね」

何時までもなんとなく自分の記憶にとどまるだろう。そう考えたことで、その日の状況は、かなり長い間六郎の記憶にとどまっていた。その記憶も、後のほうでは、あちこちがぼやけて、色の濃淡や匂いのようなものだけになってしまったが。

それから一週間ほどして、猿は六郎の庭に住むようになった。

それはごく平凡な形の猿であった。顔と髻と四肢の先をのぞく全身に、灰白色の短い毛が一面に密生していた。体軀にくらべて、顔がすこし小さく狭い感じがした。そしてそのしなびた顔には、額にあたる部分がほとんど無かった。頭蓋の毛の下端から、すぐ眼のくぼみが始まって居た。そのくぼみの一番奥に、象嵌されたような小さな瞳があった。瞳の色は、時によっては黒く見えたり、灰色に淀んで居たり、また時には青く光ったりする。それに時々かぶさる臉の皮は、薄くしなやかで、なにか精巧な皮細工の一部分のように、柔軟な艶を含んで伸縮した。髻の皮膚はいくぶん暗みを帯びた赤色で、そのつるつるした表面は、なおりかけた傷口に張る薄皮のようななめらかさを、いつも六郎に感じさせた。見ることで、その感触が実感できた。その赤剥けの皮膚の部分は、さほど広くなかったけれども、周囲の灰色の毛の部分に対応して、かなり鮮

かに目立った。鍋島が言ったように、あの頃あの基地隊のうしろの山で、六郎が時々見かけた猿たちと、同じ種類の猿であることには間違いないようであった。それは毛の色や軀の形などで、おおむね判った。ただ違うのは、あの山の猿たちは、敏捷に樹から樹へ飛び動いていたのに、この猿はその自由をうばわれて、この檻小屋のなかに踞くもっている。その違いだけであった。しかしそうした環境の差異が、筋肉や器官などの眼に見えた退化をもたらすことも、あるいはあり得るだろう。この猿にも既に、その退化が始まっているかも知れない。そう思うと六郎には、これがあの山の猿と違った、別の形の生き物のようにも感じられた。

しかし軀の形や動作だけでなく、この猿の感情や心理の動きも、野放しの頃とは全く変化しているに相違ない。同じである筈がない、と六郎は時に考えたりした。この考えは、動物心理学的な推論からではなく、眼前の猿を眺めることで、自然に浮んできた。この猿は、鍋島が言ったような、無邪気なおとなしい猿では決してないようであった。よく馴らしてあると彼は言ったが、どう見てもそうだとは思えなかった。馴らすという言葉の意味が、鍋島とおれとは食違っているのかも知れない。同一の言葉を、おれたち二人は別々の意味に使っているのだろう。そんなことも六郎は思った。

檻小屋は、鍋島が指定した通り、庭の東南隅につくった。いろいろ考えてはみたが、庭の形からしても、やはりそこ以外に適当な場所はなかった。建築は近所の釜吉という若い大工に頼んだ。

猿を一目見た時、釜吉は言った。

「あまりいい柄の猿じゃありませんね、これは。やはりお買ひになったんで？」

「預ったんだよ」と六郎は答えた。

鍋島から運ばれてきた猿は、小さな箱檻かごに入れられたまま、縁側に置かれていた。枠にはまった細い鉄棒を両掌で握って、猿は上目使いに釜吉の様子をうかがっていた。

「猿にも柄があるのかね。それじゃまるで反物はんぶつみたいだな」

「そりゃありますよ。毛並とか顔かたちによってね。こいつはそれほど上柄じゃないや」

「よく馴らしてあるというんだけれどね」

釜吉は背を曲げ、掌を膝に支えて、檻の中をしげしげとのぞきこんだ。檻の中はうす暗いので、自然と釜吉の顔も上目使いになっていた。同じ眼付きになったまま、猿と人間はしばらく、お互いの様子をうかがい合っていた。そして急に猿は両掌を鉄棒から離して、狭い箱檻のなかで、ごそごそと後向きになった。軀をすこし低めるような姿勢になり、しかし頭をうしろに廻して、顔だけは釜吉の方をき

つと振り向いていた。その小さな顔はくしゃくしゃと皺を寄せ、口はすこし開かれて、黄色い歯がむき出しになっていた。両方の口角が後の方にぎゅっと引かれていた。そのままの表情で、鉄棒の方に向けた赤い肛門から、猿は突然少量の便を排泄した。

つられたように釜吉の顔も、口角を後に引いて、猿と同じ表情になっているのを、六郎はちらと見た。と思つたとき、釜吉は掌を膝から離して、ゆっくりと上半身を元に立てた。顔に皺をよせ、並びの悪い歯を露わしたまま、咽喉の奥で音を立てるような笑い方をして、釜吉は猿の檻から視線を外らした。惨めになったようにも、また得意そうな表情にもとれる、へんな笑いであつた。

「あの猿も、笑っているのかね」

そっぽ向いてわらっている釜吉に、少し経つて六郎は訊ねた。しかし直ぐあとで、あの猿も、ではなくて、あの猿は、と言わなくちゃいけなかつたんだと、六郎は気がついた。釜吉の頬から、急に笑いの皺が消えたようであつた。

「こわがってるんでさ」

そう言い捨てると、大きく眼を見開いて、ぶよぶよした頬から顎を、釜吉はしきりに掻き始めた。こちらに見せた横顔のそこらに、吹出物のような赤い粒々が、たくさん出ている。

「猿小屋は、そこらが適當だと思ふんだがね」

南天の生えた一隅を、六郎は煙管で指した。頬を掻きながら、釜吉は遠近のない視線でしばらくそこの地形を眺めていた。やがて低い声で言つた。

「さて、どんな具合につくるかな。つくるとしても、こいつは材料によるんでね」

「そりゃ立派なやつの方がいいな」と六郎は答えた。「材料費とか日当は、この猿の持主が払う予定なんだ。だから前もつて請求して呉れたらいい」

「あ、それはあともいいですよ。どうせ同じことだから」

そう言つて釜吉は、ちらとはにかんだような笑いを、その横顔に走らせた。

猿小屋の建造は、それから十日余りもかかつた。それは六郎が想像していたより、はるかに立派な、豪華な檻であつた。釜吉は毎日ひとりできて、材木を切つたり、穴をあけたり、組立てたりした。どんな檻が出来ようと、釜吉にそれを任せた以上は、六郎は口を出すこともなかつた。六郎は一週間のうち四日仕事にでてゆく。あとの三日は家にいて、本を読んだり、釜吉の仕事ぶりを縁側から眺めたりしていた。

釜吉は朝九時頃やつてきて、ひとしきり仕事にかかり、昼になると、縁側にきて弁当を開く。日当りのいい暖かい

日なら、六郎もテツに頼んで、自分の食膳を縁側にはこぼせ、釜吉と向い合つて昼餉をとつた。釜吉の弁当箱は、すばらしく大きかった。深さも三寸余りあった。その中には、真白な御飯と、いろいろなお菜がぎっしりと詰まっていた。それを釜吉は、いちどきに食べた。こんな小柄な男のどこに、あれだけの分量の飯やお菜が入るのか、六郎にはふしぎでならなかった。釜吉は肥っているように見えたが、背丈は五尺ぐらいいしかなかった。その肥り方も、どこか不均衡で、たとえば腹は大きいのに、手足は細かった。身体の中に、肥っている部分とそうでない部分とがあつて、それらが皮膚によつて、雑然と継ぎ合わされている風な印象をあたえた。

釜吉は二十三四なのに、もう女房をもつていた。その女房は、釜吉より五つ六つ年長のものであつた。駅近くの火の見櫓の下に、小さな細長い家をつくつて、釜吉夫妻は住んでいた。なぜ六郎がそれを知っているかと言うと、釜吉の女房は闇の主食などをこっそり取扱つていて、彼も時々それを買つたりするからであつた。女房はこゝろ界限のほとんどもを、そのお得意にしていて、なかなか手広くやつていた。その方の収入があるせいとか、当の釜吉はぶらぶらしていることが多くて、自分の本業に精出す気持もないふうに見えた。頼まれれば引受けるが、自分から進んで仕事を求めることはせず、あとは働きの女房によりかかつてい

た。だから頼まれる仕事も、造作のつくろいや板塀の修繕程度で、ちゃんとした大きな仕事は委せられないらしかつた。もつとも若いから仕方がないが、腕も確かでないという評判であつた。そういう男に仕事を頼む氣になつたのも、釜吉の蛙に似た顔や動作に、六郎はもとから微かな関心を寄せていたからであつた。この男からもやもや発散するものに、なにか変な異質的なものを、六郎は以前から感じていた。こんな感じの男の生體を知りたい。それほど強い氣持ではなかつたけれども、釜吉を身近に眺めたり、また話し合つたりすることで、その何かを確めて見たい。その程度の氣持の動きは、釜吉に仕事を頼むときの六郎の胸に、うすうすとあつた。

釜吉の仕事ぶりは、噂のように確かに下手であつたが、決して雑ではなかつた。むしろ妙なところでひどく丹念であつたりした。たとえば材木に穴をあけるにしても、組み上げれば穴は見えなくなるにも拘らず、その穴の内側や底面まで、なめらかに削らねば承知しない、と言つた風なところがあつた。たかが猿小屋に十日余りかつたのも、ひとつはその為でもあつた。また別には、材料をよく吟味して、六郎の予想をはるかに超えた立派な小屋を、彼が作ろうとしていたせいでもあつたけれども。そしてその仕事ぶりは、なにか楽しそうであつた。あるいは楽しもうとする氣配が、ありありと見えた。今までは造作や板塀の修繕ばか

りで、あるいはこの猿小屋が、釜吉が手がける最初の建築物なのかも知れない、と六郎はひそかに推定した。この仕事への身の入れ方も、そのせいだと思えたり、使用する材料や道具へ釜吉が示す偏愛も、六郎はそんな風に一方的に解釈していた。

しかし仕事以外のことにたいしては、へんにつめたい無関心な傾きが、釜吉の態度にはどことなく漂っていた。たとえば猿小屋をつくっているにも拘らず、その中に住むべき猿については、釜吉はほとんど関心を持たないふうであった。あの最初の日をのぞけば、縁側の箱檻にいる猿を、彼は眺めることもしなかった。少くとも六郎が見ている前では、猿に一瞥すら与えようとはしなかった。また小屋を建てようとする時も、そこに生えた南天の樹を、まるで牛夢を引くように、無造作に引き抜いて、庭の真中に投げ捨てた。道端の小石をかるく蹴飛ばすような無造作なやり方であった。南天を大事にしている訳ではなかったが、その夕方釜吉が帰ったあとで、六郎はそれを庭の西南隅に植え直した。南天を惜しむ気持でもなく、また釜吉にあてつけるといふ気持でも、勿論なかった。ただそうしてみただけである。あまり強くない植物だと見えて、一日で南天はかなり弱っていた。米のとき汁などを、六郎はテツに頼んで、その根にかけさせたりした。南天を植え直したことも、翌日釜吉は見えて知った筈だが、別段それを口にも出さ

ないし、気にとめた様子も見せなかった。そんなことはどうでもいいと言った態度で、ちろちろと眼を動かしながら、鉤かぎを使ったり、丹念に墨縄を打ったりした。釜吉の眼は大きく見開くと、黒瞳が宙に浮くほど巨きく、鬚ひげりがなく、動物的な感じであったが、すこし伏眼になると、瞳が臉にかくれて安心するせいか、なにか狡智に満ちた、油断のならない動き方をした。しかし幅広くふくらんだその臉の皮は、黒瞳の動きが透けて見えるほど薄い。薄い上質のゴムみたいな皮膚であった。それはこの男の中のある冷情さを、六郎に何時もつよく感じさせた。しかし両棲類のそれに似たこの眼は、ふたりで向き合って会話を交えている時でも、六郎の顔を絶対に見ようとしなない。視線を相手の顔からすこしずらして、釜吉はいつも対話をする。まっすぐに相手を見ることを、極度に警戒し怖れる風であった。しかし六郎がぼんやりと眼を外にあずけている時などに、ふと釜吉のするどい視線を、顔に感じることもある。はっとして瞳を戻しても、もうその時は釜吉はよその方を眺めている。早瀬をよぎる魚の影のような、すばやい盗視であった。

「あの眼付きや身体付きは、どうも変だな。女みたいな、いや、男でも女でもないような妙なところが、あいつにはあるようだ。あんた、そう思わないか」

ある時六郎はテツに、そんな具合に訊ねてみた。テツは

考え考えしながら、そうは思わない、と低声で答えた。

「じゃ、僕だけの感じかな。どうもあの男は、雨蛙みたいな感じがする」

十何日目かに、猿小屋は完成した。二方は鉄柵てつさくになっていて、あとの二面は板張りであった。小屋の高さは、四米近くもあった。内部には、自然木の止り木や、天井から吊したブランコや、小さな椅子などがつくってあった。床が土間でなかったら、人間でも楽に住めそうであった。この出来上りには、誰よりも先ず、釜吉が深く満足したようであった。しかし六郎の側からすれば、この猿小屋が出来たために、六郎の母屋はいつそう古ぼけて、貧寒にすら見えた。廂ふしを貸して母屋をとられたような感じがなくてもなかった。仕事終いの日に、六郎は釜吉に言った。

「猿よりも、むしろ僕の方が住みたいな、こんなに立派な檻になら」

「ほんとですよ。全くですよ」

釜吉は真顔になって、口をとがらせながら言った。そして鉄柵を掌で押したり引いたりして、そのはまり具合を満足げに確認して見たりした。大工のくせに、釜吉は右手の中指に、いつも金指輪をはめていた。

「どこか具合が悪いところでもあったら、何時でも直しに参りますよ」

小屋代の支払い、直接の方がいいとかんがえて、彼は

釜吉に鍋島の住所を教え、そこに受取りに行くように言った。だから今にいたるまで、この小屋の建築費がいくら位であったのか、六郎は知らない。釜吉にも鍋島にもつい聞かなかった。その後も釜吉は、仕事のために、しばしば六郎の家に出入りしていた。猿小屋のそれではなく、もっぱら母屋の方の修繕である。母屋も急速に古びて、あちこちが次々にいたんだ。時に彼は頼みもしないのにやってきて、そうした箇所箇所の修理をしたりすることもあった。やはり商売柄だけあって、いたみのくる時期をはかり、うまく目星をつけて修繕にくるのだらうと、六郎はかんたんに考えていたが、あるいは自分がつくった猿小屋を見たいために、釜吉はしばしばやって来るのかも知れなかった。そう言えば時折釜吉は庭に立って、猿小屋に長いこと見入っていたりしていた。そのまなざしからしても、猿を眺めているのではなさそうであった。そうした釜吉の姿から、イソップの絵本などにでてくる後肢で立った蛙の姿などを、六郎はなんとなく聯想れんそうしたりした。そしてそんな時、釜吉に向けた自分の視線が、ただの好奇心みたいなものだけで支えられていることを、六郎は何時もはつきり自覚していた。網膜にうつすことだけで、そこで何かが完了してしまう一つの装置を、ちかごろ彼は自分の内部に、ありありと知覚していた。しかし相手が釜吉と限らず、そんな装置だけで自分が対象と繫つなっていること、自分にとって他とはそういうもの